

字体の選定

藤 森 大 雅 (大 節)

Hiromasa (Daisetsu) Fujimori

本作は異体字（異字）をテーマとして制作した作品である。

一般的に、正字（正体字）が『説文解字』を根拠とした正式な文字に位置付けられるのに対し、異体字は俗字、省文、譌字など、正体字以外の総称で、中国ではこれを別字と呼んでいる。

日中を問わず、書道史上に残された文字史料には膨大な数の異体字が確認できる。俗体として書かれていた字体が標準的な字体に定着していく様子など、異体字から過去の書写習慣の実態を探ることができる。

書作の観点では、表現の幅を広げる手段の一つとして異体字を捉えることができる。厳格な間架結構を特徴とし、文字の構造に自由度の少ない楷書では一定の範囲内で造形的な変化をもたらす方法として特に有効である。この点について、中田勇次郎氏は次のように述べている。

初唐の楷書はすばらしいが、竹冠は艸冠にかき、木扁は手扁に書くなど、字形の差はかなり多く、それは字形だけの問題ではなく、漢字の造形の美しさにおいても考えなければならない重要な問題である。その意味では別字の研究は、十分行き届いたものがなければならぬ。」（『異体字研究資料集成』第五巻月報「中国の別字について」）

中田氏が指摘する、別字（異体字）の字形や造形の美について、作品制作を通じて考察を試みようとするのが本論の主旨である。

その取り組みとして、今回は「蔵器待時（器を蔵して時を待つ）」（『周易』の四字句を楷書で半切一行の形式に表現することにした。楷書で表現するにあたり、二文字目の「器」と、三、四字目の「寺」は四文字という少ない字数の中で重複する構成要素があるため単調になりやすい。ここに異体字を使用して全体の変化と調和を図りつ

つ、一貫性のある表現にまとめることが重要となる。

草稿を作るにあたって、二文字目「器」と四文字目「時」を異体字で表現することにした。「器」は複数の異体字から「口」の並びに最も変化のある字体を選んだ。中央の「大」を「尢」に、「一」と「し」部の間に「口」を挿入した字体である。これは明代の董其昌に用例がある。四文字目の「時」は傍の下部を省略し、その位置に偏の「日」を上下に組み合わせた字体を選んだ。こうすることで三文字目との変化が明瞭になる。この字体は隋の「張伏敬墓誌」に使用されている。ちなみに、「器」は説文篆文、「時」は説文古文に同じ字体と確認できる字例があることから、古字の復活によって生じた異体字に分類されるであろう。注①

表現においては「器」は「口」の字形、大きさ、墨量、位置に変化をつけて単調にならぬよう配慮し、左払いと曲がり強調した動きを意識し、反対に一文字目の「蔵」は左はらい、その収筆を軽く止めて変化をつける。「時」の概形は▽を意識し、反対に三文字目の「待」の概形は△にして「時」とのつながりを考慮した。一行書は行の流れが端的に表れるため、上下の字形のつながりの他、文字の大小、墨の潤濁なども自然な表現を心掛けた。掲載作品は締め切り前日の最後に書いた一作である。

本作では敢えて書きにくい字面の語句を題材とし、異体字を使用

して字体を変化させ、全体との調和を図りつつ、一貫性のある表現を試みた。枚数を重ねるにつれて線質、字形ともに単調になったため、行意を強めることで改善を図ろうと努めたが、結果的に作為が前面に出てしまったように思う。本作では意図をもって異体字を使用したことが唯一の成果となったようであるが、引き続き、書作の視点から異体字と、その造形的特質の研究を継続していきたい。

【用具用材】

筆：鸞毛堂「花香」（羊毛）

墨：古梅園「虎溪三笑」（固形墨）＋呉竹「古心」（墨液）

紙：紅星牌棉料单宣

注

①杉本つとむ氏は『文字史の構想』で異体字が生まれる要因を以下の八種類に分けて説明している。

(a) 画数の多いものは画数のすくない異形にする。ちょうどことばで略語をつくる心理、方法に似ている。

(b) 画数を一画あるいは二画と増画して異形をつくる。これは(a)の裏返しである。

(c) 代行して結果として異体が生じる。古字の復活などもふくま

れる。

(d) 漢字一般として、上下、左右、内外などの部分の置換で異形をつくる。

(e) 楷書体が行・草書体となり、そうした運筆が一つのプロセスとなつて、再び楷書体にもどることで字体の異形をつくる。

(f) 類似系のための兼用・混用から異形が生じる。

(g) 音符の一致による部分（主として傍の部分）の交換によって異形が生じる。

(h) 意味の一致・近似、一つの解釈によって、部分（主として偏、すなわち意符の部分）を交換して異形を生じる。



藏器待時

136×35cm